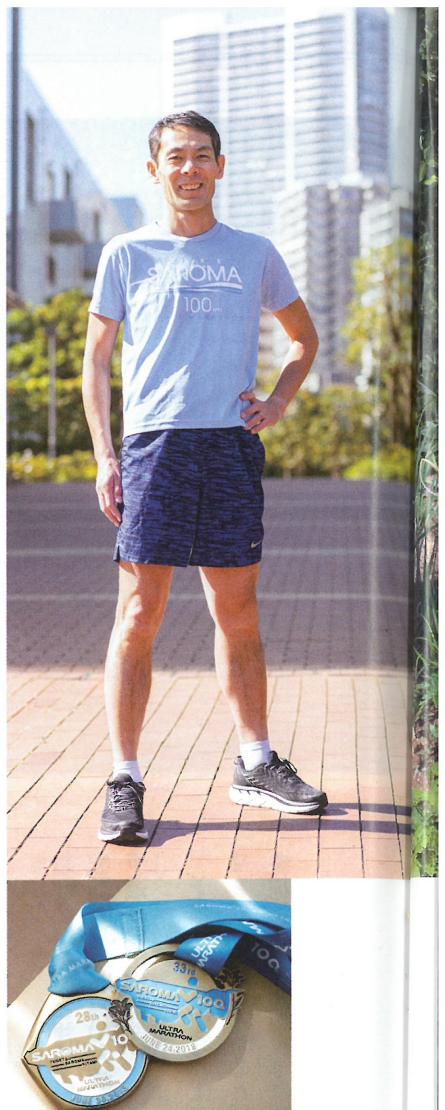




大久保淳一さん(54歳・東京)



## 生存率20%の大病を乗り越えサロマンブルー「がんが、挑戦することを更に楽しくさせてくれました」

**サロマ湖のボスターが  
つらい闘病の支えになつた**

【精巣にがんがあります】

2007年5月、当時42歳だった大久保淳一さんは、予期せぬ、がん宣告を受けた。

「月間250km走り、健康には自信があったのになぜ。告知された瞬間は、深海の底に沈んでいくような気持ちでした」

翌週の手術は成功したが、その後の病理検査で、腹部、肺、首への転移が発覚。そこから抗がん剤によるつらい化学療法が始まった。一日中、激しい吐き気で倒れ、髪が抜け、身体中に黒い斑点ができる。さらに抗が

**7年ぶりのサロマ完走  
「人生を振り出しに戻せた」**

生命の危機を脱し、在宅治療

復帰した2013年と、サロマンブルーを達成した2018年のサロマ湖のメダル

に移行したのが、2008年1月。しばらくはほとんど寝たきりの状態が続いた。「体調の良い日に散歩に出かけてでも横断歩道を渡りきれない。信号が青から赤に変わるとでも、それでもマラソン復帰への想いは捨てられませんでした」

2010年にジョギングを再開すると、同年9月の八ヶ岳縄文の里マラソンで、ハーフマラソンを3時間かけて完走。翌年には月間走行距離が100kmを超えるようになり、2012年4月のかすみがうらマラソンを4時間49分で完走した。そして翌年、満を持してサロマ湖100kmに出場。12時間39分40秒で完走を果たした。

2012年のかすみがうらマラソンをして翌年、満を持してサロマ湖100kmに出場。12時間39分40秒で完走を果たした。それを4時間49分で完走した。そ

して翌年、満を持してサロマ湖100kmに出場。12時間39分40秒で完走を果たした。

「がんで失った自分の人生を、これまでようやく振り出しに戻せたという想いでした。宿舎に向かうバスの中、友人から送られてきた祝福のメールを見たとき、涙が溢れました」

2014年に、がん経験者た

がんになって、僕の身体はゼロ状態まで落ちた。でもそのおかげで、挑戦することの楽しさに改めて気付きました。昨日より今日の方が少し長く、速く走れた。そんな成長を感じられる瞬間がとても楽しい人です。次はサハラ砂漠の250kmレースに挑戦します!」

おおくぼ・じゅんいち  
NPO法人「5years」代表理事。ゴールドマン・サックス証券に勤務していた35歳の時、取引先の部長に誘われ、ランニングを始める。フルマラソンの過去最高記録は、2004年の渡良瀬遊水地マラソンで出した3時間25分56秒。がん復帰後のベストは3時間53分43秒(2018年古河はなももマラソン)。家族は夫人と20歳の長女、17歳の長男。1964年生まれ、長野県出身



入院中の病室の枕元には、自らを鼓舞する言葉やランニングの写真も貼られている

ちが交流できるコミュニティ「5 years」を立ち上げた。現在約6400人のがん経験者たちが、WEBサイト上で自身の思いや体験談を綴っている。

「闘病中、2006年にランナー賞を受賞された李正順さんが、がんを克服されて走り続けていました」という記事を読んで、すごく励みになりました。がんと闘うには、そんなマイヒーローの存在が不可欠。がんに苦しむ方々が、それを探す一助になればと願い、この事業を始めました」

サロマ湖も毎年完走し続け、2018年には10回目の完走、サロマンブルーを達成した。

「がんになって、僕の身体はゼロ状態まで落ちた。でもそのおかげで、挑戦することの楽しさに改めて気付きました。昨日より今日の方が少し長く、速く走れた。そんな成長を感じられる瞬間がとても楽しい人です。次はサハラ砂漠の250kmレースに挑戦します!」